
春遙か

カオリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春遙か

【Nコード】

N6013B

【作者名】

カオリ

【あらすじ】

卒業式まで一週間のカウントダウン。男勝りな少女・遥はるかと軟弱少年・遥はるかの最後の七日間は、少しでも愛しい別れまでの道。『長い人生の一通過点としては、上出来だった』 更新再開↓完結しました！

七日前：もう終わりだね、過ぎ去る時間にさよなら告げる準備はできてたはずだ

「……春う？」

三月一日。どうにかこうにか進学先も決定し、来る卒業式まで残り一週間。

女子高生というレッテルをそこそこに楽しんだ三年間はあっけなく過ぎ去り、その学生生活に終止符を打とうとしている。

この時期の三年生はやることなくていけない。バイトをするには短いし、大学入学の準備を進めるにはまだ早いような気がしてしまう。

受験シーズンを考慮して敷かれていた自宅学習期間（要は学校に行かなくていい日）は本日解禁となり、久々に顔を合わせたクラスメイト達はそこそこテンションも高めに、専らラスト一週間の過ごし方を話し合っていた。

「そ、春！ あたしには春が来なかったなあ、って……」

「……それは所謂、青春というやつで？」

あたしはキラキラと目を輝かす友達に隠れてそつと溜め息を吐いた。くだらね！。

友達——志乃、という——曰く、今この学校では卒業に向けた告白ラッシュが予想されているらしい。

卒業する前に、というやつだ。志乃はそんな最後の青春劇を羨ましくと語るが、あたしには全く興味がなかった。斯く言う志乃自身、そんな相手はいないからこうして語るに止めているわけだけだ。

「ハルはいないの、そういう相手？」

うわ、来た。来ると思いましたよ。

あたしはわざと眉を寄せて軽く志乃を睨む。

「わかってるくせに」

「あー、はいはい。ハルには無縁のお話ですかー」

無縁。ええ、無縁ですよ。あたしはハルと言う名前のくせに、そういうことには一切縁がない。興味もない。

ちよつと言いつれば、ハルはハルでも“遥”と書く。春から遥が遠いハルだと、あたしは勝手に思っている。淋しいとは思わない、だって原因を作っているのは自分自身だと良くわかってるから。

「ハルはその性格さえ無ければね……」

「うつせ」

あ、またやった。そう思ってもどうにもならない。

篠崎遥しのざきはるという人間を語るにあたってまずはせないポイントは、とにかく口が悪いということだった。

自分でいうのも何だけど、本気を出せばそんじょそらのチンピラには負けないんじゃないだろうか（張り合う意味もないけど。）

いつからこうなのかは覚えていない、中学の頃はもう男子相手に日々啖呵を切っていたような気がする。これでも高校に入ってから押さえるようにしていたのだけれど、やっぱり染み付いた言葉遣いはなかなか離れてくれなかった。おまけにあたしは人付き合いも苦手、というより嫌いで、愛想というものを振りまいた経験もない。つーかそんなもので繋がりを持つような相手はいらない。

高校入学後は髪を伸ばしたり、スカートの丈を調節してみたり、多少は化粧にも手を出したり。校則違反だけど、まあそれなりに女の子をやっていた。見た目、は。でもいくら見てくれを変えたって、

そうそう中身は変わらないもんだ。

自他共に認める性格ブス——それが、篠崎遥という人間です。ええ、そうですとも。

あたしがそんなんなものだから、交友関係はかなり狭いと言える。志乃はこんなあたしと真っ向から付き合える、なかなか肝が座ったタイプの人間だ。貴重な数少ない女友達なので、あたしも邪険にしたりはしない。一応は。

「でもさ、ハルは男友達はわりと多いじゃん。何かなかったわけ」

「……多いかあ？」

「んー。多いってか、付き合いが深いみたいな。井沢くんとかさ、どうなの」

「井沢ア？」

冗談！　吐き捨てたあたしを志乃は不思議そうにみやる。何だ何だ、あたしと井沢は他人から見るとそういうふうに見えるわけ。何それきもい。自分で想像しといてアレだけかなり笑えない。

井沢はあたしと中学が同じだった、あたしの中でウザイ奴ナンバーワンに堂々君臨し続ける男だった。誰にでもこういう目障りな相手はいるものだろうけど、悲しいことに高校三年間同じクラス。（あんまりだ！）

中学時代と言えばあたしの口の悪さ最盛期だ。いくら高校で猫を被っていても、井沢の前だと全くの無意味。あたしが口調を改善する努力を早々に諦めてしまったのは奴のせいだといっても過言ではない。

デートとかしたことないの、良く一緒にいるじゃん？　そう言つて志乃が笑うもんだからますます悲しくなる。デートなんていつたよ、確かに出掛けたりしたけどあれはむしろ、と考えて嫌になった。それがそのまま口に出る。

「冗談じゃねーよ」
「まったくだ」

独り言に背後から返答あり。その声の主には十分すぎるほど心当たりがあつた。最悪。それをモロに顔にだして振り返れば、予想通りの人間とばつちり目が合つてしまう。

「あれ、井沢くーん」
「どうもー」

噂をすればなんとやらだ。井沢健吾いざわけんごは志乃にやる気のない挨拶を返し、あたしには険悪な目線を一つ送り付けてから顎をしゃくつて教室の片隅を示してみせた。その意図に気が付いてあたしは声を上げる。

「げ」
「早くしろ篠崎、待つてんぞ」

井沢は言うだけ言つてさつさと自分の席に戻つて行つた。奴の机の上には帰り支度の済んだ鞆とマフラー。

……しまった、忘れてた。あたしもいそいそと荷物をまとめる。

「何、ハルもう帰るの？」
「うんゴメン、約束あつたんだわ」

とは言つても大したことじゃないけれど。
さつき井沢に示された場所には、高校に入ってから（井沢とは別の意味で）腐れ縁の奴がぼんやりと座っている。あたしが見ているのに気が付いたのか、ふと顔を上げるとこちらを向いた。その表情がぱつと明るくなる。

…… あーあーいいからいいから、こつち向くなよ喋んなよー。

そんなあたしの願いはアレには通じない。きっといつものとぼけた声で、可愛らしく言い放つのだ。

「はるちゃん、終わったあ？ 早く帰ろー！」

ほら見る。

その声に一瞬教室がしんとなって、気を取り直したように少しずつ賑やかさを取り戻してゆく。井沢はこれを予想していたのか早々に教室からは消えていた、畜生！

大声を出した本人はきょとんと首を傾げている。お前のせいだよー、お前がそんな女子高生みたいにテンション高いからだよ！

「え、何、やだー！ ハルつてば久世くんと」

「だああア！ 断じて違うからああ！！」

志乃の言葉を強制的に遮る。あたしは鞆とコートをひつつかむと、我がクラスで一番可愛い“男子”を引き摺って教室を飛び出した。

「楽しみだなア、『つるかめ』の肉まん！」

「……ああ、ソウデスネ」

隣の男は超ご機嫌だ。るんるとスキップしそうな勢いでリノリウムの廊下を歩いていく。

あたしは足を引き摺るようにしてそれに続きながら下駄箱を目指し

た。何なんだコイツのテンション、疲れる。本当に疲れる。

「あ、健吾は校門で待ってるってー」

「……へえ、そう」

井沢は後でシバく。あたしは堅く心に誓った。教室で待ってても全然問題ねエだろがあの野郎。

「はるちゃん、どしたの？」

「別にー」

あたしの隣でにこにこ笑うコイツは、あたしとは正反対の性格をしている。

言葉遣いは柔らかいし、性格も同じように優しい。良く言えば純粹、悪く言えば天然というところか。

出会いは忘れもしない高校一年の夏、あのお節介の井沢がコイツとあたしを引き合わせた。粗雑で乱暴なあたしにはこういうタイプの知り合いがいたほうがいい、確かそんなくだらない理由だったと思う。

知り合ってみれば女々しいしすぐ泣くし、なんでコレが男なんだろう。見た目が童顔で可愛げのあるのがせめてもの救いで、そうでもなければ気持ち悪すぎる。第一印象どおりの弱っちい男だった。タメというよりは弟みたいだ。それで構ってしまったのがマズかった、たぶんそうだ。

そしてみごとに懷かれたあたしはそれ以来やたらとコイツに付き纏われ、あげく二年、三年は同じクラス。今日のように、こうして一緒に（井沢も巻き込んで）出掛けることは少くない。まったく、何だか変な縁を感じる。

（そして、何よりも）

コイツの名前は“遥”と言った。あたしと同じ字、ただし読みは『はるか』。

性格に合う女みたいな名前。そう言つと、中性的な名だとコイツは言い張るけれど。

「あ、健吾みーつけ！ 行こ、はるちゃん！」

「ちょ、待てハルカ！」

腕をぐんと引つ張られて身体が傾ぐ。ハルカは足が速い。女っぽいくせに。

あたしはコイツをハルカと呼ぶ。初めて会った日、久世くんと呼んだらすごく悲しそうな顔をされたからだ（なんでだよ普通だろ。）

ハルカを見るといつも思う。男みたいな遥あたしと女みたいな遥こいつ。逆なら、良かったのに。

知る人ぞ知る老舗『つるかめ』の肉まんは確かに美味かった。両手で紙袋を抱えながら帰路に着く高校生を道行く人々が眺めていたが、もうそんなの慣れっこだ。

「あ、そつだ篠崎」

「んん？」

井沢が頭のとっぺんを擦りながら口を開く。（あたしが出会い頭に殴った場所だ、まだ痛むらしい。）
あたしは未だ肉まんを頬張っている最中で、幾分籠もった間抜けな声を上げた。

「俺達、送別会の有志バンドで出るんだけど」

「へー」

「お前も出ねエ？」

「……は？」

毎年卒業式の前にうちの高校では送別会なるものがあって、要は三年生を送り出す為のイベントが催されている。

井沢はこれでも引退前は軽音楽部に所属していて、バンドやら何やらはやつても不思議はなかった。でもあたしは別だ。ずっと帰宅部だったし、出る理由もない。それに送別会まであと一週間もなかった。毎年の流れとして、送別会の翌日が卒業式予行、翌々日が卒業式。

「なんで。つーか今更時間ねエじゃん」

「でもお前、キーボードくらいいいけんだろ。ピアノ引けるじゃん」

「ちよつと齧った程度だっつの」

いきなりあたしをメンバーに組み込むなんて何を考えているのやら、やけに熱心な井沢に首を捻る。

横を見れば、ハルカが目をきらきらさせながらこっちを見ていた。

「……おい、まさかハルカも出るわけ」

「もち」

「はるちゃんー！ 一緒にやろうよっ」

信じられない話だが、実はハルカも軽音楽部だ。こんな軟弱なやつに楽器が弾けるのだろうかというあたしの心配を余所に、コイツはすっかり三年間部活をやりきったのだけど。人間はわからない。

「ね？ はるちゃん！」

「……………考えとく」

わっと歓声が上がったのを、聞かなかったことにしてため息を吐いた。あたしはハルカに弱い。あの無垢な目に弱い。

でもこの時あたしがこんな返事をした、理由はきつとそれだけじゃなかったんだと思う。

何だかんだ言いつつ、あと少しで終わるこの関係に名残惜しさを感じていたから。最後くらい良いかななんて、柄にもなく思ったんだ。

（気付かなかった気にしなかった。けれど確かに流れたその時間を、君とならば青春と呼べるだろうか？）

（卒業式まで、あと七日）

六日前：冬の終わり春の始まり。誰が言ったのだろう、人は別れに向かって生き

三月二日。本日も晴天なり。

今年、我が校の卒業式は三月八日に行なわれるらしい。正直言っ
てなんか微妙だ、卒業式といえば例年九日のイメージだったから。そ
ういう歌も流行ったし。

卒業まで一週間を切った生徒達が学校に言っ
てすることといえば、出席とつて友達と喋って、軽く掃除してさようなら。あとは来る送
別会に向けて出し物をやる有志の連中が集まったりするぐらいだ。
本当は学校来る意味なんて殆ど無いけれど誰も文句を言わないのは、
皆それなりに高校生活との別れを惜しむ気持ちを持っているからだ
ろうと思う。今着ているこの制服ともおさらばだと考えたら、少し
淋しくなるように。（セーラー服は見た目より遥かに面倒だ。夏は
暑いし冬は寒い、着るのは大変で脱ぎ辛い。でも、わりとあたしは
気に入っていた。）

「ね、ハル。二組の木田くん、柳瀬さんに告白するんだって」

「柳瀬？ …… ああ、去年同じクラスだった」

「そうそう！ 成功すると思う？」

知らねー。昨日に引き続き例の話題を引
つ張る志乃に呆れつつ、あ
たしは木田とやらの顔を思い浮べた。
わかるようなわからないよう
な。

つーか告白前に周りに知られてる
ってどうなんだ。

「あ、ケータイ着信来てるよ」

「ん？」

志乃に指差された先、机の上に出しっぱなしにしていた携帯電話が震えている。勢いの強いバンプのおかげで机の端から落下しそうになるそれを慌てて拾って、反射的に画面を開いた。

メール一件、差出人

（……井沢ア？）

あたしは教室にいるはずの人物をちらりと見やる。当の本人は角の方で仲の良い男子とくだらないお喋りに興じている真っ最中、こちらを見ようとしてもしない。

「……ンだよ、」

表示されたメール本文には、たった一言。

『HRの後、中央階段』

掃除はトイレに当たっていた。寒いし微かに臭いし、面倒なことこの上ない。三年間世話になった校舎とはいえ、トイレにだけは感傷も何も感じなかった。いや、感じる必要もないけど。

そんなわけですっかり疲れたあたしは（真面目に掃除したわけでもないのに）テンション下降気味で待ち合わせ、もとい呼び付けられた中央階段へと向かう。（ああ面倒臭い、）掃除の後なので人通りは疎らだ。そこに、退屈そうな井沢健吾がつつ立っているのを確認。

井沢はあたしに気が付くと、軽く片手を上げてみせた。

「よ、」

「……あたしを呼び出すたア良い度胸だな井沢ア……」

「え、ええええ！？　ちょ、待て待て何でそんな機嫌悪いの！？」

井沢は慌てたように両手を上げてホールドアップの姿勢をとる。別にあたしも喧嘩を売る気はなかった（八つ当りはしても）、だから早々に用件を聞きだしてしまうことにした。

「で？」

「で、って……まあ良いや。お前考えてくれた？　有志バンドの話」

「あー、それか」

確かに早く答えを出さなくては時間もない。井沢達はもう練習を重ねているらしいが、あたしは曲目さえ知らなかった。

正直、やってもいいかなとは思う。

高校最後の思い出、なんて青春臭くて面白いじゃないか。最後位良いかな、そう思える程度にはあたしは井沢やハルカに心を許していたし、コイツらがいるなら他のメンバーともやっていけると思う。（井沢とハルカのおかげであたしは軽音学部に知り合いが多い。あの部独特のサバサバした人付き合いは好感を持てた）（ちなみに志乃も元軽音学部だ）でも、

「間に合わないだろ……あと三日じゃ」

そう、送別会は六日に行なわれる。何曲やるのか知らないけど、今更飛び入りのあたしが間に合うはずもない。足を引っ張るのはごめんだった。

「全部で三曲やる予定なんだけどさ。篠崎は一曲だけでも良いから」
「……は、どゆ意味？」

お前、自分が足引つ張るとか思ってるんだろ？ 井沢はにやりと笑ってみせる。ンだよこいつエスパーか。中学からの付き合いは伊達じゃないってことだろうか。
心配ないんだ、そういつてもう一度井沢が笑う。

「本当はもう、ゼーんぶ完成してんの。ギターとベースとドラムだけのアレンジで。でも、篠崎がやってくれるなら急遽キーボードのパート加えようってハル力が」

「ハル力あ？」

何でハル力がそんなこと。てか、今日あいつ見てないぞ。

首を傾けていると井沢が言う。今日はハル力休みだぜ。ってお前マジでエスパー？

「風邪？」

「いや、何か家の事情とかで」

ふうん。さして興味もなかったので適当に相槌を打った。それよりも本題に戻さなくちゃいけない。

何で完成してる曲に、わざわざあたしが参加するために、新しいパートを加える必要があるわけ。

あたしがそう言うのと、井沢は困ったように小さく笑んだ。

「とにかく、一曲で良いから。な？」

「答えになってねエゾテメー」

とりあえず曲だけでも見にこいと、そのままあたしは井沢に引き摺

られるようにして音楽室に向かう。（有志バンドのグループに今の期間だけ貸し出されているらしい。）

誰も歩いていない廊下。もうすぐあたしも歩かなくなる場所。前を歩く井沢の背中が差し込んだ光に照らされていた。コイツとの因縁の六年間ももうすぐ終わるのだ、記念に一曲だけでも、参加できるなら良いかもしれない。

「ハル力がさー」

「んん？」

前を向いたまま、突然井沢が話し掛けてくる。壁に反響する声。遠くから、籠もった楽器の音が聞こえていた。他のバンドの連中が練習しているんだろう。

「オレ達が放課後バンドの練習するようになったら、篠崎と一緒に帰れなくなるなって言うからー」

「……なにそれ」

そんな理由？ そんなことの為に、あたしをバンドに引き込みたかったのか。

確かにあたし達は知り合ってからというもの、一緒に下校したり（下校ついでに寄り道したり）することが多かった。

それはあたしが帰宅部で、軽音楽部の活動日数が少なくて、おまけに同じ中学だから最寄り駅が同じあたしと井沢の使う電車の沿線にハル力が住んでいた——そんな偶然が重なったからにすぎない。

約束をした覚えもなかった。何となく、でもいつのまにか、当たり前になっっていた帰り道。

「ハル力はさー」

「なにー」

「……お前のこと、特別だと思ってるよー」
「ふーん」

ふーんってお前なあ。井沢はそう言っただけで、こいつが何を言わんとしているのか、あたしは考えようとしなかった。だって今更変わらない。そんなの知らなくていいし、知る気もないし、わからなくていい。このまま、この心地良さのまま卒業する。

「オレにとっても、ある意味篠崎は特別だけだなー」
「腐れ縁的な？」
「そーそー」

付かず離れず、最終的にはだいぶ近づいた六年。我ながら良く保ったと思う。世界で一番ウザい井沢は、あたしの人生に六年間も住み着いた。

コイツがいなくなったら清々する。それから、やっぱり少しだけ淋しいんだろう。

ハルカは井沢に比べれば短い付き合いだった。でも、とてつもなく濃い付き合いだった。

「ハルカはさー」
「なにー」
「オレの、大切なダチだからー」

あんな、ちよつとなよつちい変わった奴だけど！

井沢はからからと笑いながら音楽室の扉に手を掛けた。途端、扉の隙間から零れる爆音に小さな眩暈を覚える。エレキギターとドラムの音が好き勝手に飛び交う空間に体を滑り込ませると、人の声など全く聞こえなくなった。

「知ってるよ」

だから、あたしの最後の一言が井沢に聞こえたかどうかはわからない。

(これから何が起こるうとも、これまでの日々は変わらない忘れない)
い)

(卒業式まで、あと六日)

五日前：ねえ何処に行くの何を足掻くの！ 私たち皆みんなもう道は決められて

暖冬といえど東北の桜は咲く気配などない、そんな三月三日の雛祭り。学校に行くつもりでいつもの時間に起きてびっくりした、アレ今日土曜日じゃん。

卒業式まであと何日、そんなふうにカウントしていたけれど土日挟まっているのをすっかり失念していた。ってことは、実質残された学校に行く日数はもっと少ないわけか。

あーやべえな雛人形出してないよ。

嫁に行き遅れるだとかそういう迷信を信じているわけじゃないけど、毎年人形を片付ける時に一緒に入れる虫除けは一年が寿命だ。ちゃんと人形出して、新しい防虫剤入れてまたしまつて。そうやってお行儀良く保管し続けなきゃならない、デリケートなアレに虫食い穴が開くのは正直見たくなかった。めんどくせー……。

（あれ、メール……）

起床後からずっと放置されていた携帯電話が着信を告げる。誰だよ朝っぱらから、なんてばやきつつ手を伸ばせば差出人には『久世遥』とあった。

ハルカは機械に弱いのであまり携帯に触らない。

そんなあいつからのメールは珍しかった。本文を読んでも、どうやら午後から学校の教室を借りて有志バンドの練習をするらしいことが判明する。（あたしが出ることにしたの、井沢にでも聞いたんだろっ。）それからメールの終わりに、練習の前に一緒に昼ご飯を食べに行こうと誘う言葉が書かれていた。

「ま、いつか。暇だし」

無機質な文面からはいつもハルカらしいテンションや柔らかさは感じられなくて、ちょっとだけ別人のような気がしてしまう。

あたしは簡潔に了解の旨だけを返信して、出掛ける支度をする事にした。どうせ学校に行くなら制服で良いだろう。（楽って素晴らしい！）

……雛人形は、忘れていたことにしようと思います。

某有名ファーストフード店で待ち合わせをしていた、先に席を取っていたハルカはすぐに見つかった。……というのも、ハルカがあたしに気が付くなり大声あげて両手をぶんぶん振ったりしたからだ。ほんつとに恥ずかしい。思わず他人のふりをしたくなる。

「本当は健吾も誘ったんだけどね、昼過ぎまでバイトなんだってー」
「え、バイトしてんの井沢の奴」

何を、と聞いたらコンビニのレジ打ちだと言われた。想像してみても三秒で諦める。似合わない、ぶっちゃけ似合いそうにない。

「……ハルカはバイトとかやんないの」
「んー、やりたいんだけど……時間なくて」

忙しいのだろうか、こんなに暇な時期なのに？ あたしはハンバーガーに齒形を残しながら首を傾げる。この食べ物、行儀も何もあったもんじゃないよなとぼんやり考えながら。

「ああ、何か家の事情があるんだっけ？ 井沢に聞い」
「はるちゃんは？」

……遮られた。ハルカの癖に。
ちよつと眉間に皺が寄ったのがわかったけど、あたしの仏頂面はいつものことなので正面のコイツは気にもかけていないみたいだ。

「はるちゃんはバイトしないの？」

「あたしは長く続けたいから。大学入ってから探すつもり」

「あ、なるほどー」

カシカシとストローを口にくわえながらハルカは笑った。シェイクのストロベリー、チョコイスまで乙女趣味だ。あ、ポテトの油で指が滑る。

手を洗おうかと水道を探した視線の先、どこかで見たことのある奴が店に入ってくるのが見えた。見覚えがあるのは当たり前で、あたしと同じ制服を着ているのだ。

「柳瀬さんだね」

もぐもぐとナゲットを口に突っ込んだままハルカが言う。そうそう、柳瀬美由紀だ。待ち合わせをしているのだろうか、席に着くなり時計に目を走らせている。一体誰と？

「……木田くんだったりして」

「え、何？」

独り言のはずが口に出ていたらしい。首を傾げるハルカに何でもない、と手を振りかけて、ふと気が変わった。

「あんた知ってる？ 木田くんがあの子に告白しようとしてるとかなんとか」

「へえ」

どうやら知らなかったらしい。では志乃は一体何処から情報を手に入れたんだろうか。

もう一度柳瀬さんに目をやると、何時の間にか向かいの席にもう一人現れていた。残念ながら木田ではない、彼女と同じクラスの女の子だ。名前は知らないけど。

「この時期に告白なんて意味あんのかね」

別に木田とやらを応援する気もないあたしは早々に興味がそれで、まだ残ってる飲み物に集中することにした。ジンジャーエール、炭酸飲料の中ではお気に入り。氷が解けて水っぽくなってしまっているのに軽く舌打ちしたい気分になった。気分だけで思い止まった。

「僕は素敵だと思うけど」

「……………は？」

待て待て、何の話してたんだっけ。ジンジャーエールに向かってしまった思考ベクトルを修正するのは大変だった。どうにかこうにか思い出す、そうそう告白？

「なんで。卒業寸前に告つても無駄じゃね？」

OKでも大学が違ったら続かない可能性のほうが高いし。まあ駄目なら駄目でスッキリするのもかもしれないけれど、それくらいなら片思いの思い出として温めておいたほうが利口だと思う。そう言つと、なんだか困つたようにハル力は笑った。

「違うよ、何ていうか…………告白することに意味があるんじゃないか

な」

はるちゃんのはある意味真理だと思うけどね、とまた意味不明のことを言う。

空になったハルカのシェイクがカシヤリと音を立てた。氷の音。

「本人に意味があればそれでいいのかも」

「それ結局、自己満じゃねーか」

あはは、そうだねー。何が楽しいのか、ハルカはコロコロと笑い声をあげた。意味わかんね。こいつをわかってうとするのが無駄な行為なのかもしれない。
もうどうでもよくなって、あたしは話題を変えることにした。

「ね、何であたしをバンドに誘ったわけ」

本当は井沢から聞いていた話だけれど、なんとなくハルカの口に言わせたかった。ハルカは一つ瞬きをすると、それはね、と笑う。

「はるちゃんと一緒にやりたかったからだよー」

「…………へー」

ちよつとまで井沢、テメエの話となんか違うぞ。思ったけど顔には出さない、代わりに昨日あいつに言われたことを思い出す。（ハルカはお前のこと、）

僕、はるちゃんと思ひ出を作ろうと思います。顔をしかめるあたしの前で、妙に畏まってハルカは言った。

「はるちゃん、僕ね、大学行ったら家出しようと思って」

「え？ ああ、一人暮らしだもんなハルカ」

ハル力は東京の私立を受けて合格し、卒業後はその名の通り上京する。東北に住んでいるあたし達にとって、関東はなかなか未知の場所だ。

あたしは県内の大学に行くことが決まってるので、今の家から通うことになる。一人暮らしには憧れたけれど。

「それでね、ここには二度と帰ってこないと思うんだ」
「……え？」

正月とか夏休みとか、たまには戻ってくるもんじゃねーの？ 二の句が次げなくなっているあたしの前でもう一度、だから思い出作るんだ、とハル力は言う。

何、何だろう。何かが、

「あ、そろそろ学校行かないとねー」
「……うん」

店から出るとき見たハル力の背中に、違和感を感じたのは気のせいなんだろうか。

学校では第二音楽室を丸ごと貸し切った練習が行なわれていた。井沢と合流した後、あたしは自分の参加する曲目を一つ選んだ。某アーティストの有名卒業ソング、空で歌えるぐらい良く知っているから練習も楽だろう。

その後初めてバンドのメンバー全員との顔合わせがあつて、そこで演奏楽器の割り当てを知る。知っていたことだけれど井沢がドラム、ギターの子は志乃の友達で顔見知りだった。（名前はユリだと教えてもらった）ベースは中山くんというひよろりと背の高い男子で、なかなか気の良さそうなタイプではある。

このメンバーならまあ大丈夫だろう、ほつと息をついて自分も挨拶した後、あたしは重大なことに気が付いた。

「……おい、ちょい待て。ハルカは？」

「ハルカはボーカルだぜー」

答えたのは本人ではなく井沢だったけれど、あたしは飛び上がらなばかりに驚いた。何、お前知らなかったの？　って知るわけねーよ。

……意外だった。ものすごく意外だった。

「頑張ろうね、はるちゃん」

この軟弱少年が歌えるという、わりと驚愕の事実。

当の本人はにっこりと笑って、楽しそうにバサバサと楽譜を振っていた。

（サヨナラに向かって着実に一歩ずつ、振り返った先には何が見えるの）

(卒業式まで、あと五日)

四日前：今頃見えなかったことが見えてくるよ。それを今更と言っが、今こそよ

四日に間に合いませんでした……

四日前：今頃見えなかったことが見えてくるよ。それを今更と言っか、今こそと

三月四日。天候は曇り、久々に肌寒い。この時期この寒さが久々、なんて本当に今年の冬は暖かかったんだと実感した。

いつもの電車に乗って学校へ向かう、朝早いせいかあまり人はいない。最寄り駅から学校までは十分ほど歩かなくてはいけないのだけれど、車の通りだけが何時もどおり活発だった。

信号の少ない細い道を我がもの顔で走る車は気持ちの良い朝をぶち壊してくれる、もうちょい謙虚に走れ。

「危ねッ！」

心の中で悪態を吐いて早々轢かれそうになった。このヤロー糞親父め、携帯片手に運転しやがって。法律で禁止になったんじゃないかっただろうか。

そうこうしているうちに通学に慣れた足は自然と学校に向かう。今日は朝からバンドの練習だ。あたしの出番は少ないけど、遅れてる分追い付くために早めに行った。約束の時間まではまだ三十分以上ある。

「あれ？ 早いね篠崎さん」

「おはよ、」

音楽室の扉を開けると中山くん——ベースの子だ——が驚いたようにこちらを見た。驚いたのはこっちだ、あんた早すぎ。絶対誰も居ないと思ったのに。

「どしたの？」

「楽譜、練習は始める前に読んどこうと思って」

我ながら勤勉だと思う。中山くんは納得したように笑うと、一人で楽器の準備をはじめた。ゴツイ機械がいくつか、アンプとかいうんだろぅがあたしにはわからない。作業に没頭しだす彼を横目に、あたしも昨日受け取った楽譜をパラパラと捲りはじめた。確かに昔ピアノはやっていただけ、ブランクというものがあるのだ。

（アレンジしてある）

わざわざキーボードのパートを考えて楽譜におこしたのはハル力だった。几帳面な字で書き込みがしてある。女みてえ、と小さく呟いた。大雑把なあたしの字より余程読みやすい。

ポピュラーな卒業ソングのフレーズをゆっくり思い浮べながら、あたしは譜面を指先でなぞっていった。

「おはようございまあす」

ドアの隙間から小さな顔があらわれる。ギターのユリちゃん。制服にストライプのニーハイソックスを合わせて登校するという荒技をやったのける彼女の見た目は中々に派手だ。軽音楽部らしい、といえばらしい。

「あれ、まだこんだけ？」

背負っていたギターケースを床に降ろしたユリが首を傾げる。時刻は約束の五分钟前、もうそんなに時間が経ったのか。あたしが見ていた楽譜を閉じると同時に、勢い良く扉が開いて井沢が飛び込んできた。

「セーフ！」

「ギリギリな」

高くない気温の中で汗を流している井沢を一瞥。きつと駅から走ってきたんだろう、遅刻常習犯のこいつは間に合っただけで表彰ものだ。努力は認めようと思う。

「なんか変なところで車が渋滞しててさー。渡れなくて焦った」

「ああ、大通りでしょ？ 詰まってんのあたしも見た」

井沢の言葉にユリが相槌を打つ。大通りとは駅から学校までの通学路の途中を真横に走っている、ここいらのメインストリートだ。車の通りが一番多い、けれど信号の無い迷惑な場所。ちなみに朝あたしが危ない目にあつたのもそこである。

……そこまで考えて、はて、と思った。あたしが来たときは渋滞なんかしてなかったのに。つーか、

「ハル力は？」

「あれ、あいつまだ来てねエの？」

珍しいこともあるもんだなと井沢が首を傾げる。久世遙といえば真面目を形に示したような人間で、あれが遅刻なんて見たことも聞いたこともなかった。何か嫌だな、漠然とそう思う。

「誰か連絡来てねえの」

「井沢か篠崎に来てなかったら他はないだろ」

中山くんの言葉に井沢と二人して納得する。そうなのだ、認めるのもなんだけど、あたし達とハル力はそのくらい関係が深い。仲が良い、ってのとはちよつとちがうけれど、誰しもあたしたち三人はし

よつちゆう行動をとみにしているというイメージを持っている。

「まあ、久世の歌は完成済みだからな。練習始める？」

中山くんがそう言うのに皆が頷く中、あたしは一人で釈然としない気持ちでいっぱいだった。我ながら馬鹿馬鹿しいと思う、昨日見たあいつの様子が——というか背中が、忘れられない。あたし過保護なんだな。ハル力に甘いのは自覚済み。

「あたし、ちよつと探してくるわ」

「ハル力を？」

以心伝心という奴だ。あたしの言いたいことをすぐに汲み取った井沢が（それはそれで何かきもいな）ぴくりと眉根を寄せる。

でも一番練習が必要なのはお前なんだぜ、って言われなくてもわかってんよ。

「そうなんだけどさ」

「……じゃー俺がちよつと見てくんよ。篠崎お前は練習」

正論だ。まだもやもやするものはあつたけれど、じゃあよろしく、と井沢に任せようとしたときだった。

音楽室の外がやけに騒がしい。興奮したような話し声と、ばたばたという足音がどんどん近づいてくる。何事かと目をやった瞬間、勢い良く部屋の扉が開け放たれた。

「井沢ア！ いる？」

「あ？ 吉田、」

顔を出したのは井沢の友達の子だった。見覚えがある、確か二年

の時同じクラスだった剣道部の奴。名前は忘れていたけれど井沢がそういうなら吉田くんなのだろう、彼は妙に頬を高揚させていた。

「朝そこで事故あったらしいんだよ、大通りんトコ！」
「事故……？」

ああ、何か嫌な予感。さっきから感じていたこの感じが形になったみたいだった。血が冷たくなるような、それが逆さまに流れるような気分。この時点であたしはもう確信していた。そうして覚悟していた。次の吉田の台詞で、衝撃を受けないように。

「うちの生徒だってよ、久世ってお前のバンドのメンバーじゃねえの？」

背後からガタンと音がした。ユリが派手にギターを倒したらしい。

「……篠崎！」

一声叫んだ井沢に続いてあたしは音楽室を飛びだした。ユリと中山くんと、啞然とする吉田を置き去りにして。

結果から述べよう、ハルカは生きていた。

運び込まれた病院の緊急外来、その処置室でけろっとしている。ハルカの搬送先を突き止めるために学校の事務室に乗り込んで係のオッサンを問い詰めた（病院に電話して確認までさせた）あたしの苦労を返してほしい。

「つーかマジお前、何してんだよ」

「あはは、なんかばーっとしちゃって……」

溜め息連発の井沢に対してハルカは至つてのんびりとしていた。打撲が三ヶ所、擦り傷が少し。車に跳ねられたにしては奇跡的な軽さの怪我だったけれど、痛くないはずはない。それをへらへらと笑いやがってこんちくしょう、車の運転手を殴り飛ばしに行きたかった。

「ごめんね、はるちゃん」

不機嫌オーラ全開のあたしに、ハルカは本当に申し訳なさそうに謝罪する。

心配した？ とか聞かないのがこいつの良いところだ。ハルカはわかってる、あたしと井沢が死ぬほど心配したことも、今こうして平然を装っているあたしの心臓がまだ微妙に速く動いていることも。

「……死んだかと思った」

そう、あたしはハルカが死んだかと思ったのだ。こんな軟弱な女みたいな高校生、車に弾き飛ばされたらひとたまりもないはずだった。嘘みたいにあっけなく、死んでしまふと思ったのだ。

「ごめん」

「馬鹿」

一人でセンチメンタルになっている自分に気恥ずかしさを感じてそつぽを向いた。そんなあたしを笑いながら、井沢がまあまあと声をかける。

「つーか治療終わったんだろ、帰ろうぜ」

「うんそれがね、帰れないんだ」

はあ？ 思わず顔を見合わせるあたしと井沢に苦笑して、財布忘れちゃった、とハルカは言う。今日は定期しか持ってきていないし軽い怪我だったので相手に慰謝料なんかは請求しなかったらしいのだけど、ていうかおい、

「ちょっと待て、親に迎えに来てもらえないのかよ」

「うん、うち今日誰もいないし」

それで二人にお願いなんだけど、とハルカはしおらしく頭を下げた。鍵を渡すので、自分の家に行って財布を取ってきてくれないか。確かにハルカの家は知っていたけれど（何度かお邪魔したこともある）問題はそこじゃない。事故にあった息子を迎えに来ない親がどこにいる？ ひよっとすると、ハルカの両親はこいつが事故にあったことさえ知らないんじゃないだろうか。

（そんなのって）

結局あたしたちはハルカの家へは行かず、二人のありあわせの手持ち金で治療費を払ってハルカを病院から出した。

二人が来てくれて本当に助かった、とハルカは笑う。それに水臭いとか何とか答えながら、あたしは最後まで聞くことができなかった。

なあお前、本気で笑えてんのかよ。

（毎日に精一杯だった。けれど刻一刻とその時は迫っていた）

（卒業色まで、あと四日）

三日前：本当はもうずっと前から知ってたよ、見えてたよ。ねえ怖いよね怖かったよ、はるちゃん。

呼び掛けられて体が震えた。何で、どうしてこんなことになんてるんだろう。

あたしの目の前でハルカが笑っている。なのに、泣いているのかもしれないとあたしは思った。

何だよお前男だろ、そんな感じのいつもの罵声が出てこない、あたしはどうしてしまったというんだろう？

それもこれも全てハルカのせいだ。そもそもお前が、送別会のリハ―サルに来なかったのが悪い。それでなければ今頃あたしはこんな所には

（ねえなんで）

調子が狂うよ、

三月五日。順調に卒業式に向かっているはずのあたしの日常は、こ

ここに来て大きな崩れを見せていた。

四六時中、あの軟弱野郎が頭から離れない。

これまでだってあたしはハルカの面倒を見てきたけれど（それこそあたしはお前の母ちゃんかってくらい）それとは何かが違っていた。気にしだしたら止まらない、認めるのは癪だけれど、もはやあたしの日常生活の大半はあいつが占めていたようだった。それに今更ながら気が付いて、少し驚いたりもした。

（わかっていゝつもりだったけど、こんなに）

そんなこんなでぼんやりと午前中を過ごした。志乃に冗談半分、恋煩い？　なんて聞かれたけれど笑い飛ばす気力もなかった。だってしかたないじゃないか、これじゃあまるで。

昨日ハルカを病院から家まで送り届けたあと、井沢を引き摺って学校まで帰った。そのままキーボードの練習に付き合わせて、おかげであたしのパートは何とか形になっている。一曲にしろいて良かった、そうでなければ今日のリハーサルに間に合わない。

そう、あたしは昨日必死こいて今日の為に頑張ったのだ。なのに、あいつは！

「……ダメだな、繋がんね」

井沢が携帯を閉じて溜め息を吐く。折り返ししかつてくる気配もなく、銀色のそれは沈黙を貫いていた。可哀相な井沢の携帯には発信履歴が大量に残っているのだろう。発信先は久世遥。

そう、ハルカが学校に來ない。

昨日の今日だ、体調でも崩しているのかと思いきや朝は普通に家を出たらしい。（井沢が自宅にまで電話したのだ。母親が出て驚いた、

何だよ今日は家にいるのかよ昨日は迎えに来なかったくせに！）
学校には知られると面倒なのでまだ言っていない。これが小学生なら誘拐騒ぎだが、生憎とあいつは高三でしかも男だった。どこでサボってやがる、あんにやろー。

「……無理だな。時間ねえ」

行くぞ。井沢の声に押されてあたしは渋々腰を上げた。リハーサルがはじまってしまふ、待ったはきかない。

結局この日あたし達は、ボーカルを欠いた状態でリハに臨んだ。あたしは今日までに一度も、あいつの歌を聞けていなかった。

「……ハルカ」

それが、なんで、こんな所にいる？

学校からの帰り道、あたしの家からの最寄り駅に立つ人影を見た瞬間あたしの中で何かが切れた。文字どおりキレた。なにしてるんだこいつ馬鹿じゃねえの、

「テメエ……！！」

「……っ」

不運なことに井沢はいなくて（バンドの代表者会議なるもので居残

りだ）久々に我を忘れるくらい激昂したあたしは出会い頭、ハル力を思い切り殴り付けた。手が頬に触れる瞬間思い直してグーからパーに変えたので、結果的には平手打ち。頭のどこかに理性が残っていたのを誉めてほしい。

「はるちゃん」

ジンジン痺れる手のひらを感じながら、呼び掛けてくるハル力を無視して腕を掴んだ。そのまま駅から引き摺りだす。離してやるもんか。

一番近くの公園まで無言出歩いた。腕は握ったままだ。力を入れすぎて手のひらが痛い、けれどハル力はもっと痛かったかもしれない。ざまあみろ、

「ハル力。なんで電話でなかった」

漸く腕を解放してやると、そのままそれは力なくだらんと下がってしまった。ハル力は俯いて喋ろうとしなかったけれど、あたしは見逃す気なんて毛頭無い。それはこいつもわかつているはずだった。

「リハ、終わったよ」

「……」

「なんで来なかったの」

「……」

「……っ、ハル力！」

思わずもう一度大声を上げた。この場所に他に人が居ないのが幸いだ。ああ、さつき駅で平手をおみまいした時はきつと目撃者が大勢居たんだろうな。

「……僕、心配かけてばっかだね」

漸くハル力の口から出た、あたしの名前以外の言葉は求めた答えとは大きく違っていた。ほら、こいつはわかってるんだ。あたしが心配してたことをわかっていて、なのに、

「……意味わかんない」

あたしが呟くとハル力は小さく笑ってみせる。

「僕ね、卒業したくないんだ」

「……は」

突然饒舌になるものだから、わけがわからなくなる。急速に怒りが引いていって、変わりにまた悶々とした気持ちが残された。ハル力は笑っている。すぐく淋しそうに、笑っている。

「明日、送別会があつて。予行があつて卒業式やったら、みんなバラバラになっちゃうんだよ」

「……そうだけど、」

「また会おうね、なんて言ってもたいてい口だけじゃない？ それに僕は絶対会えないんだ、ここには戻ってこれないから——」

「——待って！」

喋り続けようとするハル力を無理矢理黙らせた。なんで、なんでそんなこと言うんだ。

そう言えばこの前もそうだった。家を出るのは知ってるけれど、戻ってこないって、来れないって何。何なんだよ。

「……何なの。何なんだよ、お前んち」

「僕のうち……」

迎えに来ない親。卒業間近の子供が、学校に来ない。電話をしたのに心配する素振りもなかった母親、二度と帰らない家。

変だよ、ハルカ。お前んちは、何かがおかしい。他人の家に首を突っ込むものじゃないけど——違う、ハルカはあたしにとって他人じゃない。

「僕の、名前」

「……“遥”？」

「女の子みたいな名前だけど、そうじゃないんだよ。本当に女の子の名前だったんだ。その予定だったんだ」

僕の、姉さん。生まれてすぐ死んだ未熟児の女の子。

ハルカが柔らかく語る、そんな話を聞いたのは初めてだった。そういえばハルカの家にはぬいぐるみがたくさんあることを思い出す。娘を想う母親が買い集めた、あれは愛情の残骸？

「母さんは僕を遥と名付けて、ずっと姉さんを重ねてたんだ。今もそう」

女の子みたいに育てるから、だから僕こんなんだよ。仕方ないけど、と困ったようにハルカは笑う。あたしは言葉を発することができずに、ただその場につっ立っていた。

「はるか、って母さんが呼んでもね、それは僕じゃない。僕をハルカという男として見てくれるのは、学校だけだったから」

『男だろ』——そういつて叱ってくれるの、はるちゃんと健吾がはじめてだったよ。それは僕の自己満足でしか、無かったけれど。で

もね、嬉しかったんだ。

「父さんはもう随分前に母さんから気持ち離れてて、家にも帰ってこない。ずっと前から決まっていたんだ、僕が高校を卒業するまでって」

体の震えを隠しながら笑うハルカに、あたしは何もできなかった。高校卒業と同時に両親の離婚が成立して、ハルカはどちらにもついて行かずに一人暮らしを始める。とうの昔に決められた運命が近づいてくるのを見ながら、こいつは何を思っていたんだろう。

「あ、でも父さんが学費は出してくれるっていうから心配いらなかったんだ」

朗らかな笑みを浮かべるハルカの手を、迷った末に掴んで握った。一日中外にいた体は冷えきっている。なんて馬鹿なんだろう。

あーあ、今日はこんなこと話すつもりじゃなかったのに！ ハルカが大げさな動作で肩を竦める。空元気がバレバレだ。

「ねえ、はるちゃん」

自己満足ついでに、我が儘言っている？

首を傾げるハルカに無言で頷いた。震えが伝染したのか、心臓の辺りが小刻みに痛む。不覚にも涙が出そうになりながら、ハルカのせいだ、と思った。あたしはいつもいつも、こいつのせいで調子が狂う。

「はるちゃんはこの前、この時期に言うなんて無駄だって言っていたけど」

ハルカはへにやりと笑みを浮かべた。いつもの軟弱そうな男の顔だ。なのに、こいつの考えてることはわからない。

「僕は僕のために、君に言わなきゃいけないことがあるから」

だから、待っててね。

握り返された手のひらが、ほんの少しだけ熱を帯びていた。

（何も知らない、見ていない、ふり。ねえ限界は迫っている）

（卒業式まで、あと三日）

二日前：旅立つ僕等で最後の祭りを。ホラ皆そうさ、馬鹿は馬鹿なりに飾ろうぜ。

更新再開しました。 永らくお待たせしてしまい申し訳ありません…

…！

二日前：旅立つ僕等で最後の祭りを。ホラ皆そうさ、馬鹿は馬鹿なりに飾ろう。

ライトが眩しい。生徒達の体温と照明の熱さを肌に感じて、頭がぼおっとしてしまう。

見てみるよハルカ、これがあたし達の世界だ。小さな体育館、押し籠められた学生達、教師と古びた校舎。

あんたが、失いたくないもの。

三月五日——送別会、当日。

少しだけ寝坊した。原因は言わずもがな。あいつに言われた言葉をずっと考えている。

僕が、僕の為に、言いたいことがあるから。柔らかなハルカの台詞がぐるぐる頭を巡る。エコーのオプション付き。

なんて自己中な奴だろう、自覚が無い分井沢なんかよりもタチが悪い。勝手に独りで悩んで自己完結して、あたしの事なんか気にも掛けやしねえ……………というのは、嘘。本当はわかっていた、あいつの頭の中くらい。何を言おうとしているのかも。

（あーあ）

あたしは、怖いんだ。今になってこの感情を認めてしまうことが。

結局10分ほど遅刻して学校に行った。本日の予定は送別会オンリー、出席は自由。卒業間際の一台イベントをサボタージュする輩なんていないと教師側も踏んでいるのだろう。実際それに間違いはなく、この三年間で遅刻魔・サボリ魔の称号を得た生徒もやっぱり体育館には顔を出しているのだった。

「遅かったじゃん」

「寝坊した」

既に照明の落とされた館内、自分の席にそろそろと近寄ると志乃に声を掛けられる。どうやらちょうど、校長による開会の言葉を終えた辺りらしかった。超ラッキー……いつも思うことだけどあの長話しはいただけない。聞かなくていいなら万々歳だ。

送別会は有志による出し物でプログラムの殆どが構成される。発表に使用するメインステージに近い所から三年、二年、一年生の順に席が並んでいて、職員はその両サイド。保護者用の席もあるが数は少ない。

一年生の頃はステージが遠くて、満足に見えなかったことを思い出した。時は流れ今や一番近く——ちよっぴり感傷に浸りそうになると、突然放送が入った。

『只今より、有志団体による発表を行います。プログラム1番——』

「よっしゃ、行くわよハル！」

瞬間、志乃があたしの手を掴んでパイプ椅子から立ち上がった。そのまま物凄い勢いでステージの前まで走ってゆく。

あたし達だけじゃない、アナウンスと同時に殆どの三年生が席を立っていた。我先にと人並みを掻き分けステージ前を陣取る様は可笑しくすらあるけれど、これも毎年のこと。皆で一体になって楽しむとする、この学校のノリはあたしも嫌いじゃなかった。

生徒達の集団大移動が落ち着いて静けさを取り戻した時、突然大きな音が体育館に響き渡った。わっと歓声が上がる。登場した有志の一番目は女の子五人によるダンスの披露で、煌びやかな衣裳に身を包んだ彼女達はBGMに合わせてながらステージ上を舞った。かなり練習したんだろう、統率された機敏な動きに皆声をあげる。

「すごいねー」
「ん」

リズムに合わせて手拍子する志乃の横であたしは頷いた。頷きながら、違うことを考えていた。
とうとう、ここまで来てしまったのだと。

（井沢たちはもう、ステージ裏で準備をしてるんだろうか）

あたしの――ハルカのバンドはこの有志発表の一番最後になる。別にトリを狙ってたわけじゃない、クジを引いた中山くんがたまたまラストを当てただけだ。

ハルカが歌う曲は三つ。その最後にだけあたしは参加する。それまではステージの傍にいさえすれば、他の生徒と一緒に送別会を楽しんでいて良いと言われた。

……正直、良かったと思う。軽音楽部でもないあたしには準備なんて何すんのかわかんないし。でも、何よりも。

(……ハルカ)

あいつに会って何を話せば良いのか、わからなかったからだ。

昨日のリハに來なかつたハルカ。はじめてあたしに、自分のことを

——久世遥という人物について語つたあいつ。

何故あたしにあんなことを言つたのか(いや、あたしが聞いちゃつただけ)聞いただけ聞いてあたしは、あいつに何もできないのにハルカは今も、苦しいんだろうか。

「いやー、良かったね今の」

「ん」

楽しみに笑う、志乃にはバンドの事は話していない。急なことだつたし、今でもうまく弾けるかわからないし。結局ハルカの歌は一度も聞いていなかったから、完成図さえ見えていない。どう考えてもぶつつけ本番だった。

くだらないことを考えているうちに次々と出し物は進んでゆく。ダンスの発表がもう二組あつて(こちらは着ぐるみを来た派手な女子軍によるパラパラと男子グループのブレイクダンスだった)、漫才やショート演劇に続き、アコギを抱えた男子二人によるフォークデュオがステージに上がった。その後がいよいよバンド発表。

ハルカ達の前のグループが歌いはじめてようやく、あたしは自分が緊張していることに気が付いた。何に、なんてもうわからない。

立ちっぱなしにも関わらず生徒達の熱は上がる一方で、盛り上がりは最高潮に達していた。皆で拳を突き上げてリズムに乗る様はライブハウスの中のよう。

この空気の中に今から、あいつらは出てくるんだ。

『有志団体によるステージ発表は残すところ一つになります。最後を飾るのは——』

生徒会に所属する女の子の、少し気の抜けた声が響く。あたしの心臓が勝手に飛び跳ねたような気がした。次いで一人ずつステージに登場する、奴らのバンド名は『つるかめまんじゅう』……果てしなく間抜けだ。そんなにあそこの肉まんが好きか、久世遥。

ベースとギターの二人が音の調整をはじめて、おや、と思う。二人とも変な形のメガネをかけていたからだ。よく見れば井沢もそう。

（なにしてんの、あいつら）

思わず吹き出しそうになって、瞬間あたしは凍り付いた。一人、足りない。重要も重要、ボーカルだ。あの馬鹿、どこいった？ まさか。

「はるちゃん」

背後から声がしたのはその時だった。小さな、小さな声だったから志乃は気が付いていない。振り返ればそこには、みょうちくりんなメガネをかけたハルカが立っていた。

「ち、ちょっとあんた何してるわけ!？」

「しいーッ、はい、これ」

可愛らしく笑ってハルカはあたしの手に、お揃いの馬鹿げたメガネを押しつける。そうして人並みを掻き分けると、ステージに真っ正面からよじ登った。

突然現れたボーカルに観客が騒めく。ひよろひよろとなよつちいそいつはペコリとお辞儀して、そのままマイクに手を掛けた。

——時間が、止まったような気がした。

全ての音を打ち消していたのはハルカの声だ。時間も気温も飲み込む澄んだ音。柔らかいのに凜とした、男にしては少し高いハルカの声。

一切の曇りを打ち消してしまうような響きの発生源が目の前細い少年だと気付けなくて、一瞬生徒達は言葉を失った。しんとした空間を割ってゆく旋律を、誰もがぽかんと見つめている。そして、突然我に返ったかのように——どっと割れるような歓声が響き渡った。

それを合図に井沢がドラムを勢い良く叩く。掻き鳴らされたギターとベースの音が混じり合い膨らんで、体育館中を包み込んだ。

（なんだ、これ）

身体の奥からぞくぞくと這い上がる感覚にあたしは震えた。こっぴうのをきくと、ヒトは感動と呼ぶんだ。声が、出ない。

「ねえハル、あれ、久世くんだよな？　すごい、凄いよ……！」

生徒達の声に掻き消されそうになりながら志乃が叫んだ。わんわんと歓声や拍手、踏みならした足の音が響く。その中でも、ハルカの声だけは消えない。

「すごい、こんなの初めて聞いた……！」

「はじめて、って——軽音部だろ？　聞いたことなかったの？」

「久世くん、あんまり部活来てなかったもん——！」

志乃につられて叫び返すうちに一曲終わり、生徒達はその余韻に酔い痴れた。ねえあれ誰、見たことある？　ハルカの正体を知りたがる声があちこちで上がっている。あの妙なメガネが邪魔をして、ハルカの顔を隠しているのだ。余程良く知らなければ見分けられないかもしれない。

二曲目の演奏が始まってからも凄まじい騒ぎだった。生徒達が飛び跳ねる余り床が揺れる。体育館の底が抜けやしないかと心配になるほどに、だ。

井沢のリズムは絶好調で、ユリのギターは高らかに響き渡った。中山くんの重低音はビリビリと痺れるくらいに良く通る。それから、ハルカ。

『最後の曲は、僕らにとって最高の演奏になると思います』

ステージに上がってからはじめてハルカが普通に喋った時には、あたしの頭はもう飽和状態だった。緊張とか悩みとか寝不足とかぶっ

とんで、ただ前を見つめる。

『最高の思い出に、なるとおもいます』

ステージのほうに勝手に足が進んだ。志乃が呼ぶ声もどこか遠くて、振り返ることなんてできなくて。

『ね、はるちゃん』

ステージ上から伸ばされたハルカの腕に捕まって、一気に引き上げられた。かけるのを忘れていたメガネは掌に握ったままだった。薄ら汗を掻いている井沢が親指を立てて、ユリと中山くんが頷いてハルカが笑っててそれから、ステージの端っこに演奏者を待つキーボードが置いてあった。

そこから後のことは、あまり覚えていない。

（さあ準備は良いかい？ 歌うんだ、僕らの歌）

(卒業式まで、あと二日)

前日：前を向いてその目を開けて。君が進むからきつと、今日は明日へと続いて

さよなら さよなら

忘れないでどうか

今この瞬間を

流した涙を

あなたの笑顔を

この心に焼き付けて

さよなら さよなら

いつかまた一緒に

笑えたなら良いな

君と僕 未来の

どこか青い空の下

この世界の片隅で

軟弱で貧弱で脆弱な久世遥がその名を伝説に残すこととなった送別会のバンド演奏。

あの子の騒ぎは凄いものだった。演奏終了後に即エスケープをキメたハルカを捜し回って捕まえるのに費やされた、あたしの気力と体力を返してほしい。アンコールを求める生徒達は教師陣の制止にも耳を貸さず、ハルカがもう一曲歌うまで頑として動こうとしなかったのだ。

勿論ハルカはこの事態を予想していなくて、ほんと困った様子だった。練習していたのは三曲だけなのだから仕方ない。

じゃあ校歌でも歌え——あたしがそう言ってステージに引きずり戻したハルカが仕方なく披露した、それがまたとんでもないことになる。ハルカが歌ったのはまだ作曲途中のバンドオリジナルで、譜面も未完成のものだった。卒業を記念してお遊びで書いたのだという。井沢がアコースティックギターを借りてきて弾きながら（井沢健吾の器用さを知って今更あたしは驚いた）横でハルカが歌っただけの何の捻りもないそれに、なんと——涙を流す生徒が続出したのだ。ありえねエ。

……いや、アリだ。あれは良かった。

本当はあたしも泣きそうだったとか、これは墓場まで持っていく秘

密。

「じゃあ今日はこれで解散な、皆ご苦労さん——明日は必ず全員が無事卒業するように——」

担任教師が出席簿を持ち上げて声を掛ける。全員それを合図に立ち上がって、号令と共に一礼した。これをやるのも残り僅かだと思えば、少しは真面目な気持ちになる。お辞儀の角度とか、ちよつとだけ気にしてみたり。ちよつとだけ。すぐに馬鹿馬鹿しくなったけれど。

「あ、ごめんこの後みんな暇？ 受験終わった人悪いけど残って——」

学級委員を努めていたクラスメイトの声であたしは顔を上げる。鞆を肩に担いで帰る準備は万端だったけれど、まあ少しくらいは良いだろう。もう最後なんだし、暇だし。

本日、三月七日。卒業式前日だ。朝っぱらから決行された卒業式予行の内容といえは、校長祝辞、来賓挨拶と送辞、答辞の時の礼のタイミングを合わせる練習だけ。とてつもなくつまらなかった。白状すると、寝た。

中途半端に寝たおかげで今も頭はぼーっとしている。それでもなんとか委員長の話に耳を傾ければ、どうやら皆で担任に色紙の寄せ書きをしようということらしい。

(ふうん)

思い出とか記念とか、正直そういうのはどうでも良かった。でもまあ受験で目一杯世話になった担任にそれくらいならしてやっても良い気がして、あたしは再び席に着く。二十九歳、独身男。彼女がいるんだらうか？

「はいはい、じゃあ色紙回すから順番にね。色ペン持っていない人いる？」

委員長がてきぱきと説明するのに従って、皆順序良くペンを走らせはじめた。書き込みは席の順だ。あたしはまだ遠い。

うちのクラスは私立を第一志望にする奴ばかりの集合体なので、卒業式前には全員の進路が確定していた。……していると、思うんだけど。実は浪人決定の奴とか、国公立後期を狙って粘る奴とかいるんだらうか。あたしはセンターも私立で使える科目しか受けてないし周りもそうだと思ってたけど、実はわからない。あまり周りのことは聞かなかった。知ってるのは志乃と井沢と……ハルカくらいだ。とにかくまあ、今暇してクラスに残っている奴は多い。数えないけど。書き終わるには結構な時間が掛かるだらう。

「ふいー、眠イ」

案の定、全員が色紙に一言書き終えた時には一時間ほど経過していた。それまで全員が律儀に教室に残っていたのは、やっぱり今を惜しむ気持ちがあるからだらうか。

作業が終わるまでの間、あたしは志乃や他のクラスメイトから質問攻めにあっていた——内容は主に、久世遥と礼のバンドについて。

帰るぞ篠崎イ、間延びした井沢の声がする。あたしは志乃に別れを告げて教室の外に出た。それから、あれ、と思う。

「ハルカは？」

「音楽室。自分のロッカー片付けるんだってさ。先に帰ってるって」
「……ふうん」

慣れって気持ち悪い。ハルカがいなければ井沢と二人で、井沢がいなければハルカと二人で。あたしがいなければ残りが、三人いるなら一緒に。

こんなルールを生み出したのは他でもないハルカだった。いつの間にかそれを当たり前だと感じる自分がいる。
もし中学までのあたしなら、井沢と二人きりなんて死んでもごめんだっただろう。吐いたね確実に。

「……あのさ、篠崎」

「あん？」

ダラダラと二人並んで歩いて、下駄箱まで到達した時のことだった。何故か躊躇うように声を上げた井沢に女子としては最低レベルの返答をして、すぐにあたしは眉を寄せる。井沢の顔がこれまでにないくらい曇っていた。情けなくさえみえる。らしく、ない。

「……なに」

「ハルカのことなんだけど」

あいつ、何か変じゃねエ？

井沢の声にあたしの心臓が跳ねた。一瞬強ばった顔を見られたかどうかはわからない。

「变つて、なに」

「いやアイツ、もとから変わってるけど……なんか、そうじゃなくてもっと」

あたしが考え込んでいたことが伝播したのかと思っただけ、そうではないらしい。何か聞いてないかと問われて、少し躊躇った後あたしは首を横に振った。

「そつか。……今朝さあ、紙配られたじゃん。予行の前、住所の」

「ああ、卒アルの」

ぼつぼつと語り始めた、井沢の言うものには心当たりがあった。今朝担任から配られた用紙の話。

うちの学校は卒業アルバムが卒業後自宅に郵送されてくるようになっていて、その住所を確認する為に渡されたものだ（卒業式の写真を掲載するためにアルバムの作成が遅れるんだろう）。新しく一人暮らしする奴は新居の住所を書けば、アルバムはそっちに送られてくる。あたしは家を出る予定なんてないから、フツーに自宅を書いて提出した。

「それが？」

「俺、春から一人暮らしなんだけど——ハルカの奴がその、俺が新しく入居するアパートの住所書かせてくれとか言うんだよ」

「……は？ ハルカが？ 自分のアルバムの届け先を、アンタの新居にするってこと？」

「そー。意味わかんねエだろ？ 二人同じ届け先になってたら変に思われるから、仕方なく俺は実家の住所書いたんだけど」

（……まさか）

嫌な予感がした。けれど限りなく確信に近かった。

鼻の頭を指先で搔く、これは困惑した時の井沢の癖だ。それを見ているフリをしながらあたしは、身体の奥底から沸き上がるものに震えた。

……ハルカ。アイツって本当に馬鹿。

「理由を聞いてもはぐらかして、ヘラヘラ笑ってるし。ハルカって実家出るんだっけか？」

「……音楽室、だったよな」

「おい、篠崎？」

目を見開く井沢に背を向ける。脱ぎかけた上履きをもう一度履いて、あたしは背後に言い捨てた。

「先帰って、井沢」

「え、ちょ、篠崎！」

何なんだよ！

叫ぶ声が聞こえても、あたしは振り返らなかった。音楽室だけを指す。

ハル力はあっさりと捕まった。音楽室に入る前に向こうから出てきたのだ。ロッカーの片付けとやらは終わったのだろうか、あれ、はるちゃんまだいたの？ なーんて言つて。

井沢はあたしの言葉通り先に帰つたらしい。少し悪いことをした。あたしはハル力と並んでいつも通りの帰り道、駅に向かいながら問いたですタイミングを考えている。ハル力がいつもに増してお喋りで、なかなか切っ掛けが巡って来なかったからだ。

「それでね、オリジナルの、MDに録音してほしいとか言われちゃつて。もう時間もないから無理なんだけど」

「嬉しそужьяん」

「うん……へへ」

歌を歌ってからハル力の元へは、こういった依頼が殺到しているらしい。目立ったことなど一度もなかったハル力はくすぐったそうに、本当に嬉しそうに笑った。

こいつが笑っていると、なんだかあたしも幸せな気分になる。

(……………て、待て待て待て)

何考えてるんだあたし！

自分に突っ込んで息を吐いた。いつの間にか駅に到着してしまって、あたし達の乗る電車は後二分でやって来る。

「あのさあ、ハル力」

聞きたいことを、聞かなくちゃいけない。

「住所のことなんだけど」

「住所？」

「今朝の、卒アルの」

「……あー」

健吾に聞いたんだね？ あっさりと問い返してくるハルカにあたしは頷いた。こいつはあたしもはぐらかすだろうか、それとも。

「なんで、あんなことしたの」

「んー……」

小首を傾げて少し言い淀んだ後、ハルカの落とした言葉にあたしは眩暈がしそうな衝撃を受けた。目を見開いたのと、ホームに電車が滑り込んできたのが同時。

それでもゴーツという耳障りな音に掻き消されるより、ハルカが言い終わるほうが早かった。

「僕、自分の存在を一からやり直そうと思ってるんだ」

電車に乗って車両の端に二人、並んで立つ。そうしてハルカはゆっくりと、あたしに事のあらましを語り始めた。歌を唄ったあの時のように穏やかに。

「僕ね、新居の住所も連絡先も、高校には教えないつもり。両親にも、言わないんだ」

「なに、それ」

「誰も僕を知らない場所で、一から久世遥をやりたい」

あたしは愕然とする。なんてことだ、と思った。

この馬鹿はここ数日で、全てを一度リセットする決心を固めてしまったのだ。卒業したくないって言ったくせに、忘れたくないって言ったくせに。

「意味、わかんないんだけど」

「そうかもね。……でもねはるちゃん、僕は今までずっと、自分は自分としての形を持てないと思ってた」

けれど違うのだと、ハル力は言った。バンドを、歌を認めてもらえた自分。男として、友達として見てもらえた自分。あたしや井沢の存在が、ハル力に可能性を信じさせた。

「僕も、進めるかも……って」

「そんなの、そんなの今のままだってできんだろーが！ ゼロから始める必要なんて、」

「僕なりの、はじめが欲しかったの。僕馬鹿だからさあ、こうやって無理矢理、後戻りできないようにするしかないかって」

「馬鹿！」

思わず叫んで、電車の中だったことを思い出した。他の乗客がこちらとこちらを盗み見ている。

この、頑固者。小さく呟いてあたしは、もうこいつの決心を変えることなんてできないんだと悟っていた。

そう、頭では理解できたんだ。でも、

「じゃあ、何？ アンタは……」

そんなの、嫌だ。

「アンタはあたし達の前からも、完全に消える気なんだ」

「……はるちゃん、」

「あたし達のこと、忘れて生きる気かよ……！！」

精一杯声のボリュームを押さえたら、代わりに腕が震えた。あたしは自分が何を口走ろうとしているのか、血の昇った頭の片隅ではわかっていただろう。それでも、止められなかった。

「アンタが——ハルカ、お前がさせたのに」

ハルカを止める権利なんて、あたしには無い。苦しい思いをして生きてきたこいつがやっと得ようとしている自由を、奪えるはずなんて無いんだ。あたしはこの背を押して、送り出してやるべきなのに。

「あたしはお前のことが、こんなに大切になってるのに！！」

言ってしまった、そう思った。渦巻いていた、認めたくなかった感情を洗い浚い吐き出してしまったんだ。

こんなことを考えるようになった原因はこいつだ。ハルカが余計なこと言うから、いけないんだ。散々人を悩ませておいてこいつは、あたしの前から消えていく。痕跡一つ残さずにいなくなる。そんなの許せるだろうか？

「……はるちゃん、明日は卒業式だね」

ふっと降りてきたハルカの言葉にあたしは顔を上げた。電車が止まっている。扉が開いていた。ここは何処だろう？

「明日は健吾と三人で、いつもみたいに並んで帰ろうね。それで、」
そこがハルカの降りる駅だと気付いたときには、アイツは既にドア
に向かって歩いていった。ホームに降り立ったハルカは車内に取り残
されたあたしに向かって、につこりと微笑む。

「それでもし、はるちゃんが僕を許してくれるなら……その後、五
時に、学校裏の公園で待つてる」

がしゃん。

扉が閉まっていつものようにひらひらと、ハルカが手を振るのが見
えた。電車がゆっくりと動きだして完全に駅から出るまで、あたし
はぽかんとその場につっ立っていただけ——それはもう、間抜けな
ことに。

「……………に、」

逃げやがった……！

気付いたときにはハルカの姿など、とうに見えなくなっていた。

（旅立つ前にたった一つ、君に伝えたい言葉がある）

（ねえ明日は、卒業式）

卒業（前編）：どうか君は笑っていて。いつか僕らがまた逢う時に、きっと目印

木田悠斗が柳瀬美由紀に告白した。

卒業式が始まるずっと前、早朝の教室。思いの丈をぶつけた木田に柳瀬もOKの返事をして、めでたく二人は付き合うことになったのだという。

志乃の情報によれば、木田は家業を継ぐ為卒業後は県外に修業の旅へ。柳瀬は父親の実家がある九州の国立大に合格したため、親戚の家に身を寄せることになる——超・長距離恋愛なんだとか。

「つーか木田の修業って何」

「さあ？」

テキトーさを滲ませながら首を傾げる志乃を小突いてあたしは笑った。二人が今後どういった恋をするのか、続くのかあっけなく別れるのか。そんなものに興味はない。

「さあて、行きますか」

志乃に言われて立ち上がる。廊下にはもうクラスメイト達が出席番号順に列になっていた。この状態で体育館に入場するのだ。

——卒業式が、始まる。

（……ベルトコンベアーを想像してもらいたい）

あたし達は制服を着せられた製品だ。高校という名の工場から大学へ、あるいは社会へ。受験が終わればタグを付けられて、後は出荷

を待つ身になる。ベルトコンベアーに乗った生徒達の図は中々にシユールだと思うけれど、あながち間違ってもいない。どんなに待ってと懇願しても時間は流れて、卒業式はやってくるから。

そんなことをつらつらと考えているうちに、何時の間にやら我がクラスの一団は体育館に到着していた。列を乱さないようにして進めば、盛大な拍手に迎えられる。吹奏楽部のナンタラいう曲に合わせて後輩や、保護者達から贈られる音。でもそれはあの日アイツ等と共に立ったステージ上で浴びた、割れんばかりの拍手に比べれば小さなものに聞こえた。

『一同、礼。着席』

苗字しかわからない学年主任の声に合わせて全員が同じ動作をする。滑稽だけれど、すっかり身に染みてしまった動きに狂いはなかった。たいした練習もしていないのにタイミングはばっちりだ。

ここから先は睡魔との戦いになる。最後の最後まで不謹慎だとは思っけれど、あたしが惜しむのは学校や友人との別れであって校長の話に興味はない。来賓祝辞も右に同じ。

名前を呼ばれて起立するだけの卒業証書授与——各クラスから一人ずつ選ばれた代表が直接壇上に上がって受け取る——が終わるまでは、誰もが暇を持て余すわけだ。これは毎年のこと。

——その退屈な空気が一変したのは、在校生代表が送辞を読み上げる順番が来てからだ。重い腰を上げた卒業生と向き合って凛と声を張る、現生徒会長。あたし達の代から次へは引継ぎ済みなので、二年生だ。今時珍しい、真面目を絵に書いたような外見の彼が読み上げた送辞は型にハマった面白みの無い物だった。……でもそれにさえ心打たれてしまう、卒業生なんて大概感傷的だ。

あたしは涙ぐむ友人たちをどこか冷めた目で見ていたけれど、答辞――卒業生代表が壇上に上がる番になったらもう駄目だった。なんで毎年毎年、代表者つて涙脆いの？ 最後まですんなり読めた例しが無い。震える声とか、息を詰める音とか。そんなものがマイクに入ったら、困る。こっちまで泣けてきちゃって、困る。

（ 思えばいとし この年月 ）

いまこそ わかれめ

いざ さらば

「はい、今日打ち上げ行く人ー！？ てか来ないとか言わせねエ、全員参加ね！ けってーい！」

大きな拍手に包まれて校歌をバックに退式した後は、写真撮影だの色紙のプレゼントだのと大騒ぎになった。うちのクラスが渡した色

紙は担任をひどく感動させたようで、渡された本人は涙ぐんでく
らいだ。サプライズ大成功。誰かがおどけてそう言っ
て、みんな笑
った。

高校最後のホームルームが終わった後は、皆思い思いの時間を過
す。思い入れのある場所や教師、後輩に挨拶に行く奴が殆どだけ
れど、教室で友達と延々だべってる奴もいる。そんな中であたし達
は、いつもと全く変わらない選択肢を選んだ。

「帰ろうぜ、篠崎」

「おー」

井沢に向かって手を挙げれば、それまであたしと一緒にいた志乃は
にやりと笑った。

「じゃあ、またねハル。打ち上げもちろん来るでしょ？」

志乃とは一枚だけ一緒に写真を撮った。あたしの使い捨てカメラは
フィルムがまだまだ余っている。
あたしはちよつと首を竦めて、曖昧な志乃に返事をした。

「行くよ。……間に合えば、ね」

「は？」

「篠崎、ハルカが待ってんぞー」

「へーへー。じゃね、志乃」

何か言いたそうな志乃を残してあたしは井沢と教室を出る。
廊下で待っていたハルカが、白い歯を見せて笑った。

「はるちゃん、健吾、帰ろ」

三人横に並んで、駅までの道をだらだら歩く。あたしの右には井沢が、左にはハルカが。三年間かけていつのまにか決まった定位置を、今日も忠実に守っている。

……三年間。長いようで短い、けれど短いあたしの人生なら六分の一。それだけを捧げてきた“高校生活”という一つの世界に、今日あたし達は別れを告げた。

「あー、にしても普通だったなア卒業式」

いったい何が不満だったのか、歩みは止めないまま突然井沢が声を上げる。

「普通って？」

「ホラ良くあるじゃん、どつかのアーティストがシークレットライブに来るとか。俺そーゆーのが良かった」

「ばああか。来るかよ、私立じゃあるまいし」

何を言いだすのかと思えばくだらない。あたしが一刀両断すれば、

井沢は不貞腐れたように呟く。

「だーってさア、小中高と似たようなこと三回もやってんだぜ？
いい加減飽きたっつーの」

「まーそうだけど」

「でも僕、その“普通”っぱいのが好きだよ」

いつものように肉まんを買うため財布の中身をチェックしていた、ハルカが視線はそのまま口を挟んだ。聞いていないようで、意外とこいつは人の話に耳を傾けていることが多い。

「大学じゃあもうこんなことやらないでしょ？　そう思うと、なんてゆーか」

「そーいう考えもありっちゃアリか」

あ、10円足りない。

ひどくショックを受けたように言うハルカが余りにも情けなくて、井沢が苦笑しながら自分の財布を出す。あたしはそれを横目で見ながら、ハルカの言葉の意味を考えていた。

普通が良い。ハルカの目から見る普通は、あたし達のそれよりもきつと。

「あーあ、でもホント早かったなあ三年間。健吾に会って、はるちゃんに会って。不思議だよねえ、毎年毎年、過ぎるのが早くなってくような気がしたよ。小学生の頃はね、僕、一生大人になることなんて無い気がしてたのに」

「それはだなア、ハルカ」

不思議だと繰り返すハルカに、井沢が自信ありげにニヤリと笑う。

「年食うごとに一年が短くなる、コレ当たり前なんだぜ」

「なんで？」

「例えば五歳のガキなら、もちろんそいつは五年間しか生きてないわけだろ。一年間はそいつの五分の一だ」

「ふんふん」

「それが、十歳なら十分の一になる。俺達十八なら、十八分の一」

「あ、」

「見る！　どんどん短くなってるじゃん！」

「わあああ！　ホントだあ　凄いや健吾っ」

「すごくね？　俺すごくね？」

アホか！

叫んだあたしの言葉は無視して馬鹿二人、世紀の大発見とか言いながら大騒ぎを始める。井沢の自信はどこから来るのかわげがわからないし、鵜呑みにするハルカもハルカだ。

馬鹿だなあ、と思う。一年は一年。誰にとっても等しく365日、時々プラス1。

（馬鹿だなあ……）

そんなこいつらを愛しいと思ってしまっあたしも、大概馬鹿だ。

「あ、俺も金無いや。篠崎、貸してー」

とりあえずハルカと井沢の頭に一発ずつ、チョップを落としておくことは忘れない。

「じゃあ、また後でなー」

馴染みの電車に乗ってあたし達よりも少し前の駅で降りて行く、ハルカを二人で見送った。
ハルカちゃんと打ち上げに出る気にいるらしい。後で会うことを井沢と約束していた。

「じゃあ、お前も打ち上げで。遅刻すんなよ、ヨネがへそ曲げるから」

「あつそー」

井沢とあたしは最寄り駅からは逆方向。いつも改札で別れる、今日もその通りにした。ちなみにヨネっていうのはうちのクラスの祭り好き、打ち上げ幹事の米谷のことだ。井沢とは仲が良い。

「じゃあ……また」

「あ、篠崎！」

井沢に背を向けた所で呼び止められて、あたしは少しだけ眉を寄せる。今までにこんなコトは一度だってなかったのに。

何、言いながら振り返ると井沢はあたしに向かって、真面目くさった顔で一言だけ言ったのだった。

「ハルカのこと、頼むな」

その時のあたしの顔は物凄く間抜けだったことだろう。自覚があるんだからそりゃーもう凄まじかったに違いない。いつもの井沢なら絶対、『何そのアホ面、お前今鏡見てみるすげー面白いもんが見れるから』くらいのことは言っただはずだ。

「……ハア？ 何言ってるの、なんで頼まれなきゃいけないわけ」
「そつか。いや、何でもない」

けれど井沢はどうかすつとぼけたあたしに向かって、そう言っただけだった。

「……悪いな。忘れろ」
「え、アンタが謝るとかキモインですけど何？」
「おおイイイイ、しばくぞ」

結局、いつものように軽い罵言の応酬に発展した後あたしたちはお互いに背を向けた。……あたしは帰るフリをして本当は、井沢が見えなくなるまで駅にいた。

「……お前に言われるまでもねーよ、井沢」

井沢は本当は全部、知ってるんじゃないだろうか。わかってる上で全部、あたしに託してしまう気なのかもしれない。

「ばあああか」

あたしはポケットにしまい込んだ定期をもう一度取り出した。さっ

き通り抜けたばかりの改札を過ぎて、ホームに戻る。時計の針は1
6時20分を指していた。今から戻ればちょうど良いだろう。

……これからあたしは、久世遥に会いに行く。

卒業（後編）：さよならさよなら、大好きだった忘れない。愛しい日々にかーニ

例えば一週間前のあたしなら、今こんなことはしていない。それが三年続いた腐れ縁の相手だったとしてもそいつの為に、わざわざ家の近くまで帰ってから学校へ戻るなんてことは。

（……怒濤の一週間だったな）

電車に揺られながらぼんやりあたしは考える。受験勉強をしているときよりずっと、時間が足りないような気がしてた。高校生活の最後。ハル力のバンド。卒業式。

（で、シメがこれか……）

あたしは今から、ハル力の話を聞くためだけに学校の傍まで戻る。何を言われるのかは正直考えなくなかった。あたし達の前から消える言い訳なら、聞きたくもない。

……あの頑固者にはあたしは何を言ったってどうにもならないんだ。だからゴメン井沢、とあたしは心の中だけで謝しておく。アイツに面と向かって謝罪したことなんてないけれど。

あたしは一つだけ、決めてることがあった。昨日家に帰って風呂に入りながら、指先がふやけるまで一人で考えた末の結論だ。あたしはそれを、きつと実行する。それはきつと、井沢があたしに頼みたいコトとは違う。

（だから、ごめんな井沢）

——昨日ハル力に逃げられたあたしの心中が穏やかであったはずな

どない。今日だって学校でへらへらしてるあいつの胸ぐらを、何度掴んでやろうと思ったか知れない。

それでもあたしが冷静に半日を過ごせたのは、昨日のうちに自分の行動を顧みることだけはしておいたからだ。それで、ちょっと待てよと思っただけからだ。

……よく考えればあたしは昨日ハルカに、とんでもない事を口走ってしまったのだった。怒りに任せて衝動的に、遠回しな告白をしてしまったのだ。あたしは自分の気持ちを認める気なんてさらさら無かったのに、その場の勢いで。しかも電車の中。

……湯船の中でそれに気付いた時には死にたくなった。

あたしには木田や柳瀬がどーこー言う資格は全く無い。志乃のあの笑顔も、本当は何か知ってるんじゃないかと思うのは気にしすぎだろうか。

とにかくあたしは自分から墓穴を掘りに掘りまくった結果、それに触れられたくなくて、学校では一切ハルカに近寄らなかつた——近寄らずとも向こうから来るんだけど。ハルカの態度は、普通だった。

もしかしたら昨日のアレはあたしの夢だったのかもしれない。夢ならもう少し楽だった。

でも、現実。それがわかっているからあたしは、今こうして電車に乗っている。ハルカに言っただけの言葉がある。

「でもとりあえず、会ったら一発殴ろう」

そんな密かなあたしの決意は、寸分違うことなく実行に移された。

「あだ——ッ！」

情けない悲鳴をあげるハル力は、学校裏に位置する小ぢんまりとした公園のブランコに腰掛けていた。家へは帰らず戻ってきたのだから、制服のままで。

それはあたしも同じで、プリーツスカートの隙間から入り込む風が冷たい。三月はやっぱりまだ春じゃないな。思いながらハル力の横、一つ空いたブランコの台にどかっと腰を下ろした。低くて冷たい。座り心地は最悪だけれど。

「な、何で殴るのー」

「うるせエよ、」

自分の胸に聞いてみる。吐き捨てるハル力は薄ら涙で滲ませた目をぱちぱちやって、それからふと黙り込んだ。

あたしが憤る理由は、きつとこいつが一番良くわかってる。わかった上で呼び出したのだから、なかなか肝が座っているのかもしれない。……何も考えていない馬鹿なのかもしれないけど。

「……でも、来てくれたんだね」

「言つとくけど、あたしは」

ぽつりと呟いたハル力の声に被せるように言う。横で驚いたように黙った気配がしたけれど、あたしはそつちを向かなかった。

「あたしは、アンタを許したわけじゃない」

「はるちゃん……」

いつものようにあたしを呼ぶ、その声には絶望も困惑も感じられなかった。ただありのままを受けとめる、凧いのような静けさだけがある。

それであたしは確信した。再認識、と言ったほうが正しいのかもしれない。本当にハル力は決めたのだ。これが、最後の確認。

……あたしのすることは、決まった。

「……僕、はるちゃんに言わなきゃいけないことがあるんだ」

ぴゅうと音を立てて冷たい風が吹いた。夕焼けと影の匂いを閉じ込めたそれを吸い込んで、あたしはゆっくりハル力を見る。

「……言えば」

久世遙と出会ったあの日の自分は、今日のことなど想像できなかっただろう。なよなよして泣き虫の同学年男子。きつと他の出会い方をしていたら、確実に軽蔑の対象になっていた。

こいつの笑顔を見ること、こいつの内面に触れること。井沢と一緒に

に振り回されてやった三年間。あたしの記憶に刻まれたのと同じように、ハルカの心にも色を付けた。

「楽しかった」

ぽつり、ぽつり。思い出話を柔らかく語る、幸せそうなハルカの顔に影がかかる。太陽が沈んでゆく過程を、あたしはハルカを通して見ていた。

「今までの僕は本当に弱虫で、一人じゃなんにもできなくて。はるちゃんや健吾に会うまでは、表面だけの友達で誤魔化して」

家に帰っても、そこにいるのは偽物の僕で。

言いながら、困ったようにハルカは笑った。何処にいても何をしていても、自分の姿が見えなかったこれまで。

「でも、はるちゃんは僕を叱ってくれるんだよね」

しつかりしろ、泣くな、男だろ。この三年間、何度ハルカに対してあたしは怒鳴り散らしただろう。

久世くんは優しいからね。久世くんだから、仕方ないよね。人の陰に覆われて弱く生きることを黙認されたハルカを、あたしは皆の前に引きずり出した。

「はるちゃんは、気付いてくれてたんだ」

言われなくてもわかってる。あたしはずっと、ハルカの優しさは自分を犠牲にした上に成り立つものだと思っていた。誰の害にもならないように、誰にでも優しく接することに慣れていたハルカ。けれど、誰とも深く関わろうとしなかったハルカに、あたしは苛々しつ

ばなしだったんだ。

面倒臭がりなのに根は世話焼きのあたしと、そんなハルカを引き合
わせたのがお節介代表・井沢。

「ごめんね、はるちゃん」

ガチャリと鎖を揺らして立ち上がり、あたしの目の前でハルカは頭
を下げた。

「今まで、たくさんメーワクかけました。ごめんなさい」

久世遥の人生は、あたし達に出会って初めてスタートラインに立つ
たのだと。ハルカは本当に、そう思っている。

「僕のはるちゃんや健吾がいてくれば、駄目なままだったよ」
「……ハルカ」

「我儘を、許してほしいんだ。たくさんたくさん助けてもらったの
に、僕は勝手にいなくなる。何一つ、恩返しできないままで」

ごめんね。

もう一度深く頭を下げたハルカを見た瞬間、ぐにやりとあたしの視
界は歪んだ。堪え切れなくなっただけのものが溢れだそうとしているのに
気が付いて、我慢の限界で、あたしは勢い良くブランコから立ち上
がる。

「馬鹿！」

スパン、と小気味良い音がした。追って感じた掌の痺れで、自分が
ハルカの頭を叩いたのだと知る。本日二回目。

勢いで頭が地に沈みかけたハルカが驚いて顔を上げた。その瞳が涙

を湛えていて——原因は物理的な痛みじゃないこともわかって、あたしは声を荒げる。

「な、に、謝ってんだ大馬鹿者っ！」

「え、ご、ごめん……あ」

「泣き虫のくせに！　まだまだ駄目人間だ、お前なんて……！」

「……ごめん」

そつとハルカがこちらに手を伸ばす。行動の意味がわからないうちにその指があたしの頬に触れて、拭うような動きをした。

……今更あたしは、自分が泣いていたことに気が付く。

「ごめん」

「違うだろ、ハルカ。お前あたしに、言うことがあるだろ……」

言えばハルカは小さく瞬いて、その後ふっと肩の力を抜いた。笑ったんだらう、目尻に柔らかく皺が寄ったのがわかる。

「……最後まで駄目だね僕。ごめんね」

「うん」

「ごめんね、はるちゃん」

「うん」

「……本当に、ごめん」

「しつこい」

「……ありがとう」

「うん——それから？」

寒いのと泣いてるのとで鼻を吸った、あたしの直ぐそばでハルカが息を吐く。気付いたら距離が近くなっていた。ハルカがゆっくりと、あたしのほうに両腕を伸ばしてくる。

「大好きだよ、はるちゃん」

「……………知ってる」

「へへ」

最後まで可愛さの欠けらもない、仏頂面で呟いたあたしの傍でへにやりとハル力は笑った。抱き締められる形になってわかる、ハル力は暖かい。

返答を求める告白ではなかった。自分の気持ちに整理を付けるために、ありのままの事実を告げただけ。それがわかっていたからあたしは、抱き返す為に腕を動かしたりはしない。

代わりに掌を持ち上げて、ハル力の頭上に着陸させた。そのままわしゃわしゃと細い髪の毛を掻き混ぜる。

可愛い可愛い、あたしのハル力。ここから旅立ってゆく、やっと前を向くことのできた、愛すべき馬鹿。

「……………ん」

身体を離して手を差し出せば、ハル力は小さな子供みたいにきょとんと首を傾げる。あたしは自分の目的を達成すべく涙を拭いた。息を吸い込めば、夜の匂いに変わっていた。

「手、出せよ」

「はるちゃん？」

「……………べ、つに手エ繋ぐとかじゃないから。握手だよ、握手！」

言ってる傍から恥ずかしくなってきた、誤魔化すように勢い良くハル力の手を取る。細くて薄っぺらい、それでも男子特有の節くれだった手。目を白黒させるハル力を無視して、あたしはぎゅっとそれ

を握り締める。

「……頑張れ」

「え？」

ハルカが本当に自分の行くべき道を見つけたのならば、あたしのすべきことはなんだろう。考えて、考え抜いて出した結論だった。それはこいつのやり方を否定することでも、束縛することでもない。受け入れて、引き上げて、背中を突き飛ばしてでも前に進めてやって。それがあたしのいつものやり方だから。

「あたしは、アンタの選んだ道を信じてる。だから、これは激励の握手」

「はる、ちゃん」

「……頑張れ。頑張れ、久世遥」

合わせた掌がぐつと握り返されるのを感じた。ハルカからの返事。三年間、毎日のように傍にいた。飽きもせず肩を並べて、ふざけたことばかりして。高校という箱の中にいる以上いつかはやってくる別れに一步步近づきながら、同じようなことばかりを繰り返した毎日。

長い人生の一通過点にしては、上出来だった。

（ハルカは、わかってないよ）

くだらない毎日がいかに鮮明だったか。怠いだけの学生生活に色がつく、大切な要素。周りが見えなくなるくらいに降り注いだ優しい感情の出所は、他人を愛しく思うこの気持ちを教えてくれたのは、アンタなんだ。

何一つ返してないなんてことない。この両手に抱えきれないほどの

ものを、あたしに残して。

「うん、頑張る……」

あたしはそれを言葉にせずに、ハルカの応えだけを聞く。

（――アンタの背中を、押すよ）

その日の夜、久世遥は何事もなかったかのようにクラスの打ち上げに参加した。待ち合わせの場所までは井沢を誘って三人で。

学校の近くにあるお好み焼き屋で散々騒いで、半ば追い出されるような形で店を出た後は流れ解散になる。家の門限がゆるい何人かは二次会と称してカラオケに向かうみたいだけれど、あたし達はそのまま帰ることにした。井沢は帰りに寄るところがあるというし、あたしも少しだけ志乃と喋りたかったから解散は店の前。

「じゃあ、バイバイ」

そう言っであたし達はお互いに背を向けた。またね、でもサヨナラでもなく、明日も明後日もまた同じ日々が続いてゆくように。

「あ、篠崎さん」

学級委員長——といってももう終わりだけ——に声を掛けられたのはハルカと井沢の背中が見えなくなつて五分以上経つてからだつた。志乃と一緒に店の前に立っていたあたしに近付いてくると、委員長はちよつとだけ首を傾げる。

「久世くん、一緒じゃないの」

「歸つたよ」

「あちゃー。これ、久世くんのだと思うんだけど」

言つて委員長が取り出したのは少し汚れた携帯電話だつた。あたしにも見覚えがある、それは間違いなくハルカのものだ。クラス全員の会計を最後まで残つてまとめていた委員長が見つけたらしい、その携帯電話はひっそりとテーブルの下に置いてあつたのだという。

「篠崎さんならまた久世くんに会うことあるよね？ 渡してもらえ
る？」

「……わかつた」

そう返事をしたけれど、あたしは知っていた。ハルカはわざと携帯電話を忘れていったのだ。

あたしと井沢、その他数人の軽音楽部員と僅かなクラスメイト。たつたそれだけのメモリーが入つた携帯。自宅の番号さえ入っていない。

住所も連絡手段も全て手放して、ハルカはこの町を出ていく。明日の早朝には発つのだと、本人に聞いた。

見送りには行かない。代わりにあたしは井沢を連れて、このハルカの携帯を捨てに行こう。場所は町の外れにある、あいつのお気に入り
の川が良い。去年三人で花見をした、桜並木のある場所。

（――頑張れ）

未練が全く無いといえは嘘になる。でもあたし達は今やっと、自分の道を進みはじめるから。

始まりさえしない恋の終わりと同時に愛を知った。優しい気持ちの破片を得ることができたあたしは、少しはまともな大人になれるかもしれない。

もしこの先あたし達の道が一瞬でも交差して、再び出会うことがあるならば。

あたしはとびきりの笑顔を見せてやろう。少しは男らしくなっているであろうあいつを見たら、きっと笑える。

あの歌のようにどこか、この世界の片隅で。

春遙か（終）

卒業（後編）：さよならさよなら、大好きだった忘れない。愛しい日々にかーニ

完結です。本当は昨年の自分の卒業式に合わせて書き始めたのですが、実生活が思いのほか忙しく中途半端になってしまいました……。一年越して……（滝汗）今年は閏年なので曜日等ズレが生じていますが見逃していただければ幸いです。最後までお付き合いください。った方に心から御礼申し上げます。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6013b/>

春遙か

2010年10月12日04時22分発行